

ウルリム
響

響

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第42号

2007年2月20日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

献金を通しての新しい取り組み

尾松 澄代

「有珠の教会では1、2人の女性が、年金生活の中から精一杯の思いで献金を続けています」とおっしゃった北海道教区婦人会代表の言葉が耳に残っています。このように教会の女性が、懸命に献げて下さっている献金とは、日本聖公会婦人会の感謝箱献金と被献日献金であり、この2つの献金は日本聖公会婦人会活動の大切な柱となっています。

米国聖公会の女性たちによるUnited Thank Offering(一致感謝献金)に触発されて始まった感謝箱献金は、婦人たちが日々の喜びを祈りと共に感謝箱献金箱に献金し、それが日本聖公会婦人会に集められ、日本聖公会の台湾伝道の補助を皮切りに、特別養護老人のベタニア・ホーム建設と運営、その後は聖公会生野センターやアジア・アフリカ地域の宣教と自立支援にと百年余の歩みを続けてきました。

一方、被献日を日本聖公会婦人会の創立記念日と定め、全国で礼拝を捧げ、その折の献金を女性の教役者の養成と援助に役立てることを旨として80年、今日に及んでいるのが被献日献金です。

さて、近年の教会・婦人会を取りまく世の中の変

化に伴い、今、日本聖公会婦人会では今後の方角を検討し、この2つの献金のあり方についても再考と転換を計っています。

まず、日々の感謝のお献げに専心し、その後の奉献

先のことは神様にゆだねてという従来からの感謝箱献金の思いを一步進め、奉献先との交流や関係の継続を計り、お互いの理解を深め、痛みと祈りの共有を主眼にします。このためにコア（感謝箱献金事務局）を立て、奉献先の情報の収集と会員への情報伝達に力を注ぎ、奉献先への人材派遣やその人材の養成なども目論んでいます。被献日献金も従来の働きに加え、会員や教会に拘わる方々の主体的学びを、直接顔の見える方法で応援しようとしています。

冒頭の有珠の女性のように、従来の趣旨を心に刻みながら、100年来の献金を忠実に守り続けてくださるお一人残らずに、この新しい取り組みを理解していただくことが最も重要です。そして高齢化や、少人数になって淋しい女性の方々にも、奉献先の方々との共なる祈りを通して生き活きしていただけることを願っています。

(おまつ すみよ 日本聖公会婦人会会長)



もくじ

献金を通しての新しい取り組み/1

時のしるし 「ひと(他人)の国」ではなく/2

共に行こう、この道を一ソウル教区司祭合唱団の来日公演が残したもの一/3
故張準相牧師追悼礼拝説教/4・5

写真 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7

多民族・多文化共生のすすめ② 静かなブーム…おやじバンド…/8

韓国からのお便り④ 新年早々/9

こんな本あります④ 在日女性文学『地に舟をこげ』創刊号/10
詩『生誕・二題』/11

リレーエッセイ・ご案内・余韻/12

キリスト者詩人尹東柱・は、1942年春、海を渡って立教大学に留学した。24歳であった。2ヵ月ほどしてノートに記された「たやすく書かれた詩」は次のように始まる。

「窓の外には 夜の雨がささやいて
六畳部屋は ひとの国」

「六畳部屋」は東京の彼の下宿であろう。しかしこれはただ故郷を離れた青年の孤独を歌ったものではない。自らの名前、歴史、文化、精神を葬ることしなければ生きること自体を許さない日本という国を、「ひと（他人）の国」と感じ、認識した言葉である。「ひとの国」は、異なるものを同化するか、それとも「よそもの」として排除するか、その二つしか知らなかった。

彼は詩の終わり近くで次のように言う。

「灯火をともして 闇を少し追いやり
時代のように来る朝を待つ 最後のわたし」

「最後のわたし」。彼はすでに死を予感し、覚悟していた。この詩から1年と少しで彼は逮捕され、治安維持法違反で懲役2年の判決を受けた。そして1945年2月16日、福岡刑務所の独房で獄死した。それから62年が過ぎた。

尹東柱の死後2年、1947年3月に施行された教育基本法は、罪なき人々のおびただしい血と涙を流させた植民地支配と戦争を悔いて、「これからは絶対に戦争しない。国家に戦争をさせない。子どもたちを戦いに行かせない」という切なる決意をこめて定められたものである。その前文は次のようにうたわれていた。

「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。」

ここには異なるものを排除し多様性を認めない

「ひと（他人）の国」ではなく

井田 泉

「ひと（他人）の国」ではなく、さまざまな人が違いを越えて一緒に生きることのできる国が目指されていた、少なくともその可能性に大きく道を開いたものであった。

ところが昨年12月22日に公布・施行された「改正」教育基本法は、1947年の基本法の文言を巧みに残しつつ、教育の目的・目標の重点をすっかり変えるものとなってしまった。

一点のみを挙げる。「教育行政」について1947年の法は次のように規定していた。

「教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである。」

教育は、主権者たる国民全体に対して責任を負うものとされていた。「不当な支配」とは国家や行政、軍、財閥などが意識されていたはずである。ところが新法はこうである。

「教育は、不当な支配に服することなく、この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきものであり、教育行政は、国と地方公共団体との適切な役割分担及び相互の協力の下、公正かつ適正に行われなければならない。」

「法律の定めるところ」、国家、行政の権限が強大化した背後に、「主権在民」は隠されてしまった。

尹東柱のいのちを奪った「ひとの国」の闇が、ふたたび深まりつつある。この国を「ひと（他人）の国」にしてはならない。この時代に私たちが必要とするのは、主イエスが見ておられた「神の国」の幻を見ること、その実現を信じ、希望をもって歩むことである。

「ついに、我々の上に、霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり、園は森と見なされる。そのとき、荒れ野に公平が宿り、園に正義が住まう。正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものは、とこしえに安らかな信頼である。（イザヤ32：15-17）」

「神の国のしるし」を見出し、それとつながり、互いに励まし合いたい。違いを尊重しつつ共に生かし合って生きることを目指す働きは、時代の闇の中の光である。聖公会生野センターの働きがさらに祝福されることを心から願う。

（いだ いずみ 京都聖三一教会牧師）

共に行こう、この道を —ソウル教区司祭合唱団の来日公演が残したもの— 柳 時京

昨年12月7日から13日まで「ソウル教区司祭合唱団」の来日公演が行われた。管区正義と平和委員会・日韓宣教協働プロジェクトが主催、関東3教区生野センター委員会の支援、公演を受け入れてくれた東京・中部・大阪教区の後援で、東京立教学院チャペル・名古屋聖マタイ教会・大阪川口基督教会の3箇所で開催を行い、延べ450名ほどの来場者を記録した。その他にもカバティランのクリスマス礼拝、聖三一教会での主日礼拝で歌の奉仕を行った。

大阪では公演に先立ち、聖ガブリエル教会の創立者チャンボニョン張本栄司祭の司祭按手50周年・逝去40周年という節目の時を記念し、日韓合同で追悼の礼拝を捧げた。

公演にお越しくださった皆さんから「8名の司祭が目を合わせ、息をそろえて歌う姿、メロディパートに注意しながらも力強く歌う様子から、日常的なチームワークが元となっている協働牧会のスタイルを感じた」「音楽の果たす役割は大きい、心のハーモニーはすべての根源だと再認識した、感動的なイベントとして心に残る」「神の正義と義による平和を祈る私たちの心を代弁してくれた素晴らしいコンサートだった」などの感想と共に、チャプレンを含めた9名の司祭が1週間以上不在になることが可能という、ソウル教区の



東京にて



名古屋にて

聖職層の厚さに羨望の声も上がった。

司祭だけで構成された合唱団でありながら、歌のレベルや公演内容で好評を博した今回の来日公演は、コンサートを通して日韓の教会の信仰の交わりを図ると共に、公演の入場料収益や合唱団のCDの売り上げを聖公会生野センター支援のために奉獻するという目的も併せ持っていた。何よりも、日韓の協働宣教の課題として生み出された「生野プロジェクト」への関心を改めて共に確認したことに大きな意味がある。

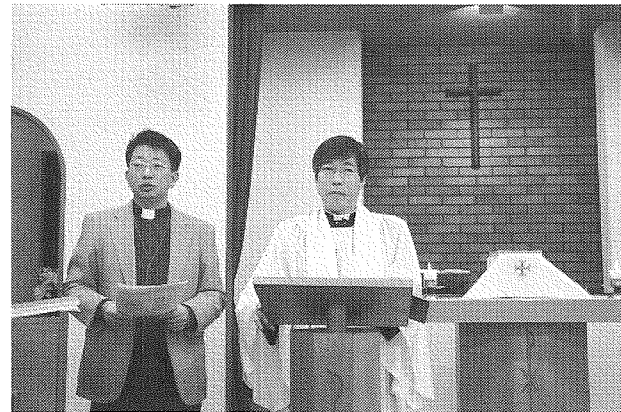
今回の来日公演が、日韓の両聖公会が積み重ねてきた過去20年間の交流の歴史を踏まえ、今後もしっかりと肩を組んで共に賛美の歌を歌いながら、私たちへの神の呼びかけに共に応えるための新たな兆しの歌声になることを心から願っている。

心に響く平和のメッセージを素晴らしい歌で伝えてくれた司祭合唱団に感謝し、今後の活躍への加勢を願うとともに、公演と滞在などの面で司祭団を温かく迎え協力してくださった各教区の皆さんに、この紙面をお借りして心から感謝申し上げたい。

（ゆ しぎょん ソウル教区、立教大学チャプレン、
管区日韓宣教協働プロジェクト委員）
（日本聖公会管区事務所だより第213号より抜粋）

共に行こうこの道を(ルカ5:1-6)

チャンジュンサン チャン ボ ニョン
故張準相(張本栄) 牧師追悼礼拝説教



張司祭の追悼礼拝で説教する金根祥司祭(右)と
通訳の任大彬司祭(左)

父と子と聖霊のみ名によって、アーメン

まず聖書の物語に耳を傾けてみたいと思います。ゲネサレト湖畔で夜通し苦勞して漁をしたにもかかわらず、シモン(ペテロ)一行は一匹の魚さえもとることが出来ませんでした。イエスは彼らに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われました。もしペテロがイエスのお話しに従わず、網を引き揚げってしまったら、イエスの言葉はむなしくなってしまう。前後の状況から考えると、そのようになる可能性はかなり高いでしょう。漁師として成長したペテロ、初対面のイエス、夜通し苦勞して疲れ果てた漁師たち、そして網の手入れにかかっていた彼らの状況などを考えてみると、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」というイエスの言葉は、まさに「空言」や「戯言」になりかねなかったでしょう。

しかしながら、イエスの言葉は福音になりました。戯言から福音に変わった理由は、ペテロがイエスの言葉を受け入れたからです。言い換えますと、ペテロがイエスの「とんでもない話」を聞き入れ従ったからこそ、イエスの話しは戯言ではなく福音になったという話しです。

今日多くの人々は「召命」(神の呼びかけ、お召し)に関心を持っています。教会では聖召とも言います。英語では“Vocation”と言います。実際にこの召命が、本当の召命になるためには、それに対する「応答」が何より大切であることが分かります。神のお召しに応答するとき、私たちは荒野の戦士、

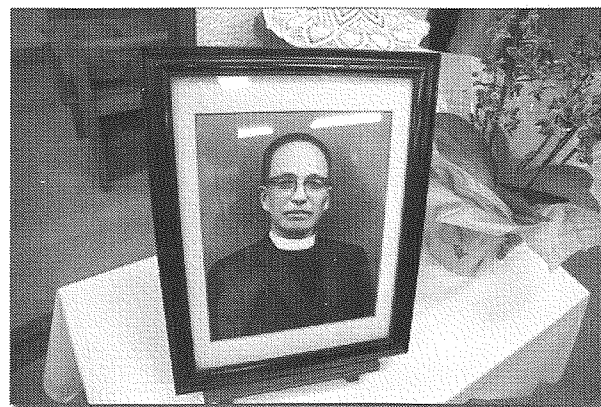
2006年12月12日
聖ガブリエル教会(聖公会生野センター)にて
説教: 金根祥司祭(ソウル教区)

神の働き人になります。

1900年12月、今から106年前、大韓帝国(当時)忠清道公洲郡面草鳳里に張萬石にという一人の子が生まれました。そして、1966年大阪警察病院で逝去されました。66年間を生きておられましたが、張先生は生涯、様々な事情により「してはいけないこと」ばかりを選んで生きておられました。これは、先生が独立運動に関わったこととか、特別な職業即ち炭売りや醤油販売などのことを言おうとしているわけではありません。

張先生は伝道師として13年間、執事として18年間、そして司祭として10年間を過ごしなが、日本にいる朝鮮人を対象に伝道活動に生涯を捧げました。それを言うためです。考えてみればお分かりでしょうが、言葉どおり日本帝国主義の時代に半ば強制で連れ出せられてきた朝鮮人にキリスト教の信仰を伝えるということは、全く鼻で笑われるような無謀なことでした。

その時の日本聖公会や日本のキリスト教について私は分かっておりません。そして当時の張準相(張本栄)という青年の熱い情熱についても、私としては知るすべがありません。私が確に知っていることは、今この話しの通訳に当たっている任大彬司祭が、司祭張準相(張本栄)という大きな木



故張司祭の遺影



川口教会で熱唱する司祭合唱団

の孫であり、彼もまた司祭の道を歩んでいるということ。です。

聖公会生野センターについても日々の歩みを全て把握しているわけではありません。遠い記憶としては、第一回目の韓日宣教セミナー(1984年)でお会いした徐千萬(大川千萬)さんによって初めて張準相(張本栄)先生の存在が紹介され、それ以降、聖ガブリエル教会の礼拝が大阪城南キリスト教会で共に捧げられるようになりました。そして聖ガブリエル教会の再建築を目指しての募金活動に韓国側も参加し、翌年200万円の献金があったことを思い出します。しかし、確かなのは聖公会生野センターに張準相(張本栄)先生の魂が今も生き続けていることです。

ここに故張準相(張本栄)先生を追悼するため一緒に集められた兄弟姉妹の皆さん!

先生は、遙か前の時代に、人々が好まない、しよともしなった働きをなさいました。しかも自分の町からも、聖公会からも、教区からも、国からも、海を隔てた韓国からも忘れられ、見捨てられた人々のために命をかけた方でした。神様はその働きに彼を呼び寄せ、張準相(張本栄)先生は、進んで引き受けたのかは分かりませんが、日本語で言う「よーし!」という気合で神様から任された働きに臨んだのでしょう。

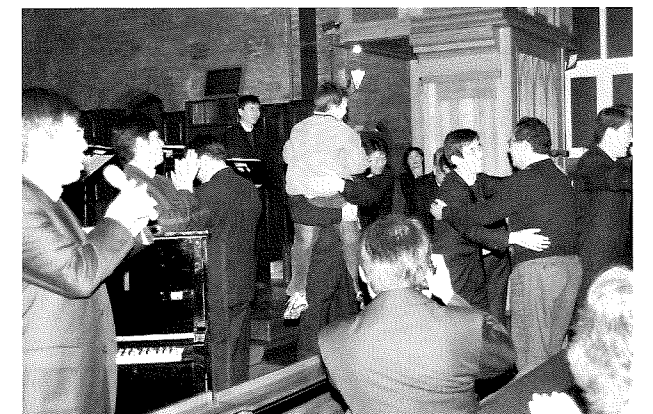
先生が亡くなられてちょうど40年が過ぎました。

もし張準相(張本栄)先生が今日ここにおられたら、どんな表情をお見せになるのか、どういうことをおっしゃるのかと、想像してみます。皆さん!このセンターを愛し支える多くの方々…。日本人であれ朝鮮人であれ、或いは韓国人であれ、もしくは両方に当たるか否かを問わず、私はそれらの方々張準相先生の後を踏むべきだと思います。決して易しくない道でしょう。誰もが避けたがる、行きたがらない道でしょう。あえて張先生

の時代より大きい壁にぶつかるかも、より多くのストレスがあるかも知れません。そのときは大声で「いやだ」と言えた時代でしたが、今は「了解しました、そうします。お疲れ様です。」と言うだけで、何もしようとしない人々が多い時代になっています。神のみ言葉を、むなしい言葉にする、過ぎ去る風にしてしまう人々こそ、自分たちは決してそうではないふりをして、嘲る人が多いかも知れません。

主イエスの中に在って兄弟姉妹である皆様!

皆さんが聖職であれ信徒であれ、聖公会のメンバーであるか否かなど、或いは韓国人であるか否かなどは全然問題になりません。私は、今の神様の呼びかけがかかっているのは、そしてそれに応えて神の言葉を実現する奇跡がまさに皆さんにかかっている、ということをお伝えしたいです。張先生は神のみ言葉がむなしい言葉にならないように、み言葉がみ言葉になるようにするため、福音を真の福音にさせるため険しい時代を堂々と生きておられました。



公演終了後「ハグ」で、感動を分かち合う出演者、来場者

今度は私たちの出番です。私たちがしなければ誰もする人はいません。共に行きましょう、この道を。険しい道ではあるが、肩を組んで共に歩いて行きましょう。故張先生を偲ぶ皆さんの心の中に、張先生の信仰と情熱が炎のように燃え上がることを心から願っております。

祈りましょう。

主よ、あなたのお望みならどこにまでも駆けつける者とならせてください。険しく難しい道でも、共に歩めばきっと至れるという信仰をもって、一歩一歩進む者とならせてください。私たちが張先生の跡を踏むものとなりますように。主イエスのみ名によって、アーメン。

(きむぐんさん ソウル教区司祭合唱団チャブレン)

のりばん・デイサービススタッフ



磯野太郎さん

早いもので、のりばんに来てから3月以上経ちました。調理師資格がある僕ですが、のりばんで作る韓国料理は毎回新しい発見をくれます。初めての人と慣れるのに少し時間のかかる僕で

すが、ハルモニたちと週2回、昼食を共にするのはとても楽しみです。呉光現さんが来られない時は男性が僕だけになることも多くありますが、「おねえさん、おかあさん、おばあさん」たちに囲まれてとても幸せです。

1月からデイサービスでも働くようになりました。ほんの少しのお手伝いのつもりで来たのですが、聖公会生野センターの幅の広い活動に少し接しつつ「働きながら学ぶ日々」を楽しんでいます。これからもよろしくお願いします。

(いその たろう)

聖公会 生野センター

フォト ギャラリー

ソウル教区司祭合唱団



素晴らしい歌声と、交わりの時。ソウル教区司祭さんたちの大阪の川口基督教会での合唱。(2006年12月12日)

クリンもだん美術展



今年は商品化を目指して、ショッピングバッグにデザインをしました。多種多様な作品が所狭しと展示されています。ここから将来のデザイナーが誕生するのでしょうか？楽しみです。(2006年11月26日～12月10日)



のりばん

恒例のクリスマス会、今年是在日3世パンソリ歌手の安聖民さんが来演！歌って踊って楽しい時を過ごしました。

(2006年12月20日)

ありがとう、これからもよろしく

もう8年、まだ8年。ウルリムに原稿を書くのは2回目、ボランティアになって1年が過ぎた頃に、この居場所が快適であるということを書いた気がします。この8年間で100人以上の人との出会いがあり、他の団体との交流も深まり、その中で私のやりたいことも見えてきた。今、この場所はこれからの旅の私の母港になった。

(いのぐちまさお クリンもだん美術教室ボランティア)



猪口雅夫さん

静かなブーム……おやじバンド……

金光敏

私の住んでいる生野区で今、「おやじバンド」がブームだ。一昨年の結成以来、各地で引っ張りだことなり、新聞でも取り上げられた。昨秋は、四国松山で開催された日本で最も大きな人権教育の研究集会「全国人権・同和教育研究集会」で報告と演奏を行い、感動の渦を巻き起こした。この「おやじバンド」、大阪市立大池中学校の校長、教頭ら教員、PTAの現職、前職役員らで結成された異色のグループ。そのユニークさゆえに周りから驚かされているが、各方面でなかなかいい評価を得ている。

大池中学校は在籍生徒の半数以上がコリアン（国籍は多様）で、外国人生徒の在籍率の高さは日本でも屈指だ。この中学校でPTA内の軋轢が表面化したのが3年前、なかなか決まらなかったPTA役員の構成をめぐる葛藤であった。いま、PTA役員のなり手が少なく、各地の学校で同様の問題が起こっている。人間関係の希薄化や産業構造の変化など、保護者のPTA活動への参加が難しくなっており、PTA発足が大幅に遅れたり、条件付きでやっとPTA会長が決まったりと、学校と地域社会の関係が大きく変化しつつある。

大池中学校も同様だ。そもそも大阪市生野区は、中小零細企業と自営業の街。この間の経済不況と産業構造の激変は、保護者たちの学校参画をいっそう難しくした。そうした中、04年度のPTA発足が大幅に遅れ、2学期半ばにようやくスタートするという事態が起こった。いや、この2学期半ばのPTA発足は、回避しようと思えばできた。というのも、発足遅れの一番の原因となったのはPTA会長のなり手の不在だったのだが、実際には会長に立候補した人がいたからだ。しかしこの立候補をめぐり、立候補した当事者と現職、歴代保護者らとの間で軋轢と葛藤が生まれた。

何を隠そう。なり手のいない中で立候補したのは在日コリアンの保護者だった。担い手がいらない中、「それならば」と在日の保護者が手をあげたのだ。しかし、このことが思いもよらず、大きな波紋を巻き起こすこととなった。

現役のPTA役員や次期会長指名委員会の保護者のみならず、歴代のPTA会長、役員OBなどによる校友会にもその波紋は広がった。「在日のPTA会長就任はこれまで前例がない」ということであった。議論がたたかわされた。日本人の保護者の中にも「大池中学校の子どもたちのことで一生懸命がんばってくれる保護者なら、日本人でも在日でもかまわない」と

いう意見もあれば、「今、前例を破ることはためらいがある」という意見。在日の保護者の中にも「在日はずし」はおかしい」という意見もあれば、「今強行に主張して日本人社会と対立する形になることは不安だ」というためらいなど、双方に感情的なぶつかりも起こり、在日に対する差別的な考えをもつ人々の存在も浮き彫りになった。

しかし、生徒在籍数の半数以上が両親、もしくは父母、祖父母のどちらかがコリアンの大池中学校で、「在日のPTA会長がこれまで一人もいなかった」こと自体が不思議なことであり、それを「まったくの偶然」というには無理がある。実際にPTA活動の実務の担い手として、多くの在日の保護者たちは大きな役割を果たしてきた。学校教育においても民族学級（民族クラブ）が設置され、民族教育を推進するさまざまな活動が取り組まれている。そうした実態、教育理念とは逆行するかのようになり、PTA内部の“慣例”は続いてきたのだ。

小・中学校のPTA会長は地域社会の要職だ。しかも地域社会の要職者は、地元の議会議員と密接につながるなど、地域の政治ピラミッドの一端を担ってきた。そうしたこれまでの日本人社会の伝統的価値観や社会秩序から見て、「要職には日本人であることが当然」とされてきたのだ。ゆえに「在日はずし」の慣例を揺り動かした大池中学校のPTA会長をめぐる出来事は、地域の既存の政治秩序を作用する、意外に大きな問題をはらんでいた。

この問題に直面した在日保護者たちは、時代が変わろうとも、このような差別や偏見が残っている現実をあらためてつきつけられ、憤り、そして苦しめられた。結局このときは在日側が譲歩し、会長に立候補された在日の保護者が副会長に就任した。それでも、初めてPTAの5役に在日が加わった。

「おやじバンド」。実は、このときの当事者たちが中心となって構成されている。会長に立候補した在日保護者と、当時のPTA会長や役員、前会長、在日で初めて選出された現会長、そして混迷の中、「子どものために学校とPTAは何ができるのか」との姿勢でコーディネートに徹した校長、教頭、教員。

演奏先で彼らは過去のことに触れる。彼らは、このときの出来事をタブー視しない。むしろ、繰り返し話し合い、語り合いながら、当時のつらい思いを出し合う。それはお互いにこれまで経験したことのない交流だった。その彼らをつないだのは、青春時代を謳歌した音楽だった。音楽を合言葉に集まり、旋律をかなで、練習後に大好きなお酒で、互いの労働の疲れを癒しながら、心をひとつにする。

植民地支配の深い傷も、結局、踏みにじった側、踏みにじられた側の双方が語り合い、痛みやつらさを共有し、克服するほかない。対話と共感が人と人をつなぐ基本なのだ。そして対話を媒介する何かが必要だ。ここでは「音楽」がそれを担った。この取り組みから忘却し、水に流してしまう「和解」ではなく、記憶し、触れ続ける「和解」の意味を問い直す。国と国を語るときも大切な視点だ。

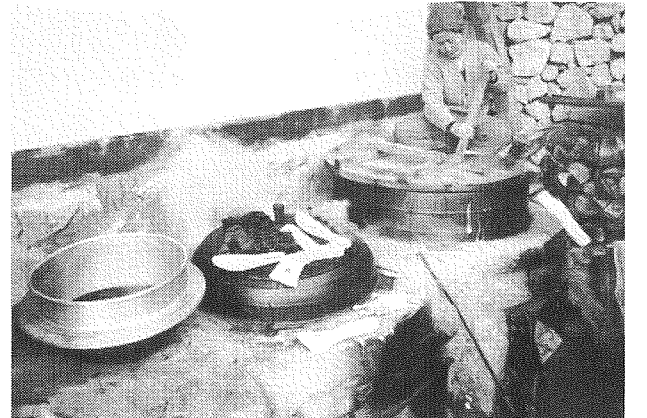
（きむくあんみん コリアNGOセンター事務局長）



生野地域福祉アクションプラン発表会で歌う「おやじバンド」の面々（2006年7月、生野区役所にて）

新年早々

中村香



昔ながらの韓国の農村の「台所」

滞在を終え、お次はイム先生の「コンガンキョシル—健康教室」に参加した。イム先生のお話を聞き、安全なものを正しく食べて健康になろう、という教室である。イム先生のお話は経験、知恵、そして笑いだ。並行して正農会の総会が行われた。正農会とは日本の愛農会（キリスト教の精神に基づいて作られた、有機農業に取り組む日本百姓の全国組織）の創始者、小谷純一氏が来韓された時に作られたものである。神様の愛を、命を造りだす“農”を通して実践しようという、韓国百姓の全国組織（超教派）である。実はイム先生は正農会の会長なのであった。イム先生の話と、正しい農業に取り組む百姓先生たちの話と、その百姓たちの手によって作られた美味しいご飯は、私の心と身体に糧になっていった。そうして11日間の旅を終え、田舎味噌をリュックに押し込み、家路についたのだった。

農村は今危機に瀕している。私たち人間は食物を食べなければ生きていけないのに、食物を与えてくれる自然や、育てる農について無関心というのは、なんとも皮肉な話である。衣食住、結局私たちの周りには、安全なものなくなった。私はそのことを痛切に感じる。なぜなら私は、そのしっぺ返しをもらいに食らった人間だからである。いわゆる現代病だ。都会においては生殺し状態である。

新年早々、心であるとか、身体であるとか、食べ物であるとか、自然であるとか、農であるとか、生きるということであるとか、そんな本質的なものを学ぶ機会が与えられた。

わたくしごとではあるが（常にそうだが）、3年間住んだソウルを離れ、いよいよ来月、引越しをすることになった。行き先は未定、目的は帰農、未来はバラ色。次回からは「田舎からの便り」になります（嘘？）。

さらば喧騒の街、ソウルよ。

（なかむら かおり ソウル在住）

断食をしてみた。1月1日から5日間の「モムビウギー身体を空にする」に行ってきた。今やかなりの健康マニアになった私は、断食に挑戦してみたかったのである。ルンルン気分で実家に電話をかけたところ、「何考えてんのよあんな!!」と猛烈反対に合った。

主催は、韓国メソジスト教会の中にある、農村宣教訓練院という組織である。都市中心社会の今、生の基盤である農村を救おうという運動を繰り広げている。こんなものを主催するぐらいだからよほど面白い組織に違いない。

断食は、かの有名な日本の西式健康法にのっとって行われた。私は毎日が「今日が峠です」状態になった。が、常にあった腹部の痛みが無くなったのと、ひどい鼻炎もちなのだが、びた一文も鼻水が出なかった。

その時、「シゴルチプ—田舎の家」という共同体の園長さんと同室になった。「健康のため断食にきました。」と言う、何だかわけの分からないやせ細った外国人女性を見てよっぽど哀れに思ったのだろう、「うちにおいで…」と拾われた。

身体は悪いが運だけはしゃかりき良い。

「シゴルチプ—田舎の家」は本当に田舎にあった。障がい者、お年寄り、病気の人、職員が共に生活している。近所の人手伝いに来る。創始者であるイム先生は韓国で有名な人だ。ある教派の牧師であるが、教会からは給料をもらったことが無いという。昔ながらの製法で味噌や醤油などを製造販売し、それでもって運営している。

ある夜は「健康教室」で食べる豆腐を作っていた。大きな大きな釜を火にかけて、ぐるぐるぐるのかき回している。新年を迎えてから、石鹸・シャンプー・リンス一切を使っておらず、ここに来てからは身体も洗ってない。髪の毛ベタツ。着たきり雀。そんな風でオレンジ色にチリチリ燃えるかまどの火を見ていたら、長田の町を轟々と焼き尽くしたが広場ではそれを囲む人々を暖まらせていた火を思い出し、阪神淡路大震災のことを思い出した。

教会は避難所になり、近所の人、おじいちゃんおばあちゃん、怪我人、ボランティアの人、教会の人、ごっちゃになってやんややんや生活していた。まるで共同体のように。こんな田舎の風景と生活が、現代都市、神戸の震災時を思い出させる。

私の実家が神戸だと知ると、阪神淡路大震災のことを色々尋ね、私は韓国で初めて震災のことについて色々話した。震災の時の切なさ、忘れていくことの切なさ。あの時の懐かしさ、日本の懐かしさ。無性さに焼き芋をほおばった。旨。

まるで夢のような3泊4日の「シゴルチプ—田舎の家」

生誕・二題

丁章

ワビトの生誕

日本民族者であることをつきつめていくと
日本民族者でないオノレにゆきいたる
オノレをオノレにいたらしめた民族性を
それでもつかみなおすとき
オノレはワビトとして生きなおる

サラムの生誕

朝鮮民族者であることをつきつめてゆくと
朝鮮民族者でないオノレにゆきいたる
日本民族者であることをつきつめても
日本民族者でないオノレにゆきいたる
オノレをオノレにいたらしめた民族性を
それでもつかみなおすとき
オノレはサラムとして生きなおる

丁章（ちょん・ちゃん）

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）

詩集『マウムソリー心の声ー』（新幹社）

詩集『闊歩する在日』（新幹社）

丁章さんの詩集（第3集まで発刊）は
聖公会生野センターでも取り扱っています。

在日女性文学『地に舟をこげ』創刊号

磯貝 治良

待望の雑誌が発刊されました。『地に舟をこげ』（在日女性文芸協会編・社会評論社発売）です。立派な単行本に匹敵するので本欄で紹介しします。

朝鮮半島にルーツを持つ女性ばかりの文芸誌は初めて登場しました。小説、詩、短歌、評論、随想、紀行文、軽妙なコラムなど、にぎやかにきらめいています。

じつは私も「〈在日〉文学の女性作家・詩歌人」という評論を在日朝鮮人作家を読む会の文芸誌『架橋』26号に発表したばかりです。在日朝鮮人文学は1960年代まで完璧に男性中心でした。70年代に詩の宗秋月、小説の成律子などが登場して、80年代に実力のある作家、詩歌人が活動を始め、90年代以降は女性文学が男性文学に伍しています。その変遷を〈在日〉社会の変容にかさねて跡づけ、主要な作家・詩歌人について論じたのが上記評論です。だから『地に舟をこげ』の発刊は、いっそう心強いのです。

女性文芸誌発刊の意図は、高英梨と澤地久枝による巻頭対談「在日女性の表現をめぐる」に鮮明です。これまで在日史のなかで女性の表現がないがしろにされ、パブリックな形をとることがなかった。在日女性によって語られる歴史抜きには、日本の近現代史はまっとうにとらえられない——簡単に言えば、それが発刊の意図です。

現在、在日女性作家のクリンナップを打つ3人が小説を発表しています。

金蒼生の「豚の仔」は、語り手である女性が済州島を訪ねて、父母と次姉の墓を探しあぐねる場面から始まります。そして時をさかのぼって、専横的な長兄に仕切られる家父長家族と、奔放に生きながら切実に一生を終えた次姉をめぐる、〈在日〉の身世が語られます。長兄と姉妹たちの間にひきおこされる生々しい諍いが描かれ、語り手の長兄に対する抵抗感に女性の意思が表出されます。家族のなかの国籍分断も影を引いています。このよ

うに要約すると簡単すぎますが、作者特有の濃い感受性が発揮された作品です。

金真須美の「ロスの御輿太鼓」は、日本籍を取得した在日青年がロスアンゼルス^{ロサンゼルス}の多国籍タウンを訪ねる話です。在米日本人との出会いを通して、青年が自分の存在性を探すワンカットと言えます。「羅聖の空」などと同じロスもので、目線をさらに若い在日世代にシフトさせています。

深沢夏衣の「恋歌」は280枚ほどを一挙掲載です。在日女性の〈私〉と日本人女性琉子との濃密な時間を描いています。その濃密な時間は、琉子の「裏切り」と決別によって終止符を打ちます。「私」が〈在日〉であることは陰影のようにしか描かれていませんが、「主従」の関係にあった二人の立ち位置は逆転して、「私」は前方へと変化していくのです。二人の人物に密着して内面を探索する手法を採りながら、「私」の変化は「世界」との絆を発見する過程です。

小説の他に宗秋月、中村純、キム・リジャの詩、言語を手がかりに国民国家の超え方を模索する朴和美^{パクヘミ}『「国家語」の呪縛を超えて」、在日無年金者の不条理な現実をレポートする呉文子^{オムンジン}「在日一世の介護問題」、エコロジカルな眼差しで記す李美子^{イミジン}の紀行文「ボギルトへの旅」など多彩です。

男性中心にあった〈在日〉文学は、国家・民族・歴史と人間とのかかわりをめぐる「大きな物語」を描いてきましたが、女性の表現は身体をくぐらせて、民族意思と併走する家族・私・性の物語を描いています。そのことが〈在日〉文学の枠組みを広げ、しなやかな強さを生み出しています。この1冊からもそのことがうかがえます。

（いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表）

▼ 在日女性文芸協会は

神奈川県藤沢市弥勒寺1-13-8

▼ 電話042-486-8129

大橋 襄

安倍政権になってから「この国のかたち」が、「愛国」とか「美しい国」などといった茫洋とした言葉の真綿に包まれて、何かしら不吉なものへと変形しつつあるような不安にかられる。

そもそも、私が生まれた1929年ごろから日中戦争、太平洋戦争の17年にわたる「戦時」という狂気の時代を生きのびてきた者にとって、「愛国」といえば「アーメン・ソーメンの非国民」と浴びせられたからかいやののしりの声、「美しい国」といえば「おお、晴朗の朝雲に聳ゆる富士の姿こそ金甌きんおう無欠揺るぎなきわが日本」を称える愛国行進曲の歌詞が、いまだに反射的に脳裏でうずく。PTSD（心的外傷後ストレス障害）みたいなものだ。

当時、「一億一心火の玉」や「天皇の赤子せきし」になりきれなかった人びと、日本に連れてこられた異国の人びとなどは過酷な仕打ちを経験した。しかし、あのこと「非国民」呼ばわり

された人こそ本当は「愛国者」、「愛国」の旗振りをした人たちこそが国を滅ぼした「亡国の民」であったかもしれない。まさに、どんでん返しの大パラドックスだったではないか。

このたび成立した「改正教育基本法」では、「公共の精神を尊ぶこと」とか「我が国と郷土を愛する態度」などの理念が加えられた。不道徳や犯罪多発の時代、目ざわり、耳ざわりの悪くない文言だが、これからの解釈や運用、関連法の行方次第では、いつ恐ろしい姿に豹変するやら。私のような生き残りの人間は、「日の丸」や「君が代」に抱くのと同じ胸騒ぎがする。

「人間という種族から愛国心というヤツをたたき出すまでは、諸君は決して静かな世の中を送ることはあるまい」（訳文は創元社「ことわざ事典」から）とは、あの偉大な皮肉屋バーナード・ショウの言葉だが、「愛国」とはまことに重い、苔むした漬物石のようなシンドイ言葉である。

（おおはし たかし）

「愛国心」

NPO MEMBER'S CARD
入会のお誘い

聖公会生野センターではNPO活動支援の一環として上記クレジットカードの取り扱いをしています。このカードにはいるだけで聖公会生野センターの寄付ができ、利用金額の0.4%が自動的に聖公会生野センターの寄付になります。

詳しくは聖公会生野センターのホームページ又は事務局までお問い合わせください。

余韻

■先日初めて北朝鮮からの「脱北者」（私は経済難民・亡命者と考えているが……）の証言を聞いた。十数年前、初めて聞いた日本軍強制性奴隷（いわゆる従軍慰安婦）のハルモニの顔と同じように怨み・怒り・悲しみが私の胸を突き刺した。なんとすでに日本に「脱北者」が140名ほど帰国・帰日して、東京と大阪に集中して居住しており、ほとんどの人が息を潜めているという。その人たちが人間らしく生きることを保障する責任の一端は間違いなく日本政府にもある（ウルリム第34号参照）。

■今年は韓日で「選挙の年」。はざまで生きる在日にはどちらにも一票を行使する権利が奪われている。一度行ってみたいものだ。「投票所」というとことに……。 （ピックアンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
 - 普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：宇野 徹

編集人：大橋 襄